国語部会

県研究主題 生徒一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　　松本　光（県央地区）

〈研究主題〉 「生きる力」を育む言語能力の育成 ～小グループ活動を通した書く力の育成～

１　提案内容

小グループでの活動を通して取材や交流を行うことで、考えを深め、書く力を高めることができるのではないか。

（１）課題設定の工夫

職場体験との関連から身近な社会として自分たちの住む地域に目を向け、紹介する文章を相手意識を持って書くという課題を設定した（『愛川町の魅力を紹介しよう』）。

（２）２回の小グループ活動

①１回目・・・題材決め、取材での小グループ活動（２時間目）

愛川町の魅力を個人で取材し、その分かち合いのため小グループ活動を行った。「レポーター方式」でグループの代表者一人が他のグループに移り、自分のグループの話し合いの様子を伝えるとともに、他のグループでどんな話し合いがされたのかを聞きとる、という方法をとった。

②２回目・・・下書きを読み合う小グループ活動（４時間目）

書いた下書きの文章を小グループ内で交流し、コメントを付箋に書き合い、それをもとにしてワークシートに自分が受けたアドバイスをまとめるという活動をさせた。

（３）研究の成果と課題

①研究の成果

ア　より効果的に伝えたいことをアピールする工夫

生徒は知らなかった情報に触れ、新たな発見があったことで考えが深まり、書く材料を得ることができた。（１回目の小グループ活動）

また清書の文章は、問いかける形の文や、ナンバリングを用いた文章にしたり、マイナス表現をプラス表現に変えたり、数値を示すなど具体性を増した文章や相手意識をもった文章に改善された。（２回目の小グループ活動）

イ　グループ活動による学習意欲の向上

小グループは意見を出しやすく、自分の考えが仲間の役に立った、という自己有用感があるため意欲の高まりが見られた。

②研究の課題

ア　生徒の相互評価の難しさ

付箋のコメントは良い点を一言書いているものが多く、改善点の指摘が不十分だった。相互評価の視点を授業者が明確に示す必要があった。

イ　授業者による評価の難しさ

小グループ活動の評価の手立てをどうするか、またワークシートや作品等、授業後の評価をどうするかに課題が残る。さらに生徒の振り返り活動を設定するとよかった。

2　協議内容

清書の書式の決め方や取材の際の指導、成果物の発表の機会、生徒に書かせたものの評価法について質疑応答があった他に以下の点で協議された。

（1）１回目の小グループ活動の成果について

レポーター方式によって個人が取材した内容について、より多様な視点で題材をとらえさせ、自分の考えを深めさせる、ということがねらいであったが、このねらいの達成のためには他の方法も考えていくとよい。しかし選材につまずいている生徒にはたいへん有効な方法であった。

（2）交流のための小グループの構成について

今回の授業における小グループのメンバー構成は人間関係のバランスを考え、授業者が意図的に組んだ。また、原則１グループ３人、という人数については活動に参加しきれない生徒が出ないように配慮したものである。

活動のための人数は３人、もしくは４人が適しているが、活動の内容に応じてグループ数が増えすぎないよう６人グループも有り得る。また、いろいろな教科で同じメンバーの小グループでの活動をとり入れている学校もある。

3　まとめ

（1）単元を貫く言語活動

「実生活で生きて働く言語能力」を育て、また思考力・判断力・表現力の育成を図るため各教科で行われる言語活動を支えるスキルを身につけさせるという視点をもって国語の授業づくりを行っていくことが大切である。そのためには単元を貫く課題解決的な言語活動を指導事項との関連を図りながら組み入れた授業を構想していくことになる。その点で今日の授業は指導事項をしぼりながら小グループ活動により、生徒に具体的な気づきをもたせ自分の表現に生かすように導くことができた。これは学習活動としての評価が自分の表現を客観的に見る目を育て、表現能力を伸ばすことにつながったと考えることができる。指導事項との関わりがあいまいな言語活動では付けたい力がつかず、「活動あって学びなし」の授業になってしまう。単元を貫く言語活動がどの領域でも必要である。

（2）まとめの場面の振り返りの大切さ

「指導計画の作成等にわたって配慮すべき事項」では、生徒が学習の見通しをたてたり、学習したことを振り返ったりする活動を計画的に組み入れること、と書かれている。たてた見通しがどのくらい実現できたか自分の言葉で振り返ることが大切である。こうした学習を繰り返すことで「メタ認知能力」を付けさせることができる。そのためには振り返りの視点を明確に示したうえで、ここで何を学んだのか、身に付いた力は何だったのかを自分自身で十分考え、言語化させる工夫が指導者側に必要である。また、その振り返り自体も、努力を要する生徒をつかんだり授業の在り方を振り返る点で指導者側にとって重要な材料となる。

提案２　　提案者　三藤　敏樹（横浜地区）

＜研究主題＞

「実生活で生きてはたらく言語の能力」を育成する指導と評価の一体化

１　提案内容

(1)　「実生活で生きてはたらく言語能力」を育成するために

・国語科の授業における言語活動を、生徒の学習や生活の実態に合わせて設定する。

※「国語科の勉強をすれば、自分自身のふだんの生活や社会に出て役立つと思いますか。」との問いに対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせると９割以上の生徒が肯定。（横浜市学力・学習状況調査）

※「原稿を書いて読む」などという場面に出会うことは少ない。即興的なスピーチを求められることの方が実生活では多い。

次の４つの状況を設定し、それらの状況における１分程度のスピーチを１０分程度の時間で用意する。

ア　職場体験の昼食中に、『今関心のある時事問題』について話すことになった。

イ　「サマーフェスティバル」の昼食時間中に、学校行事の紹介や自分の経験・考えを話すことになった。

ウ　進路の学習として高校説明会に行ったところ、『進路の選択についての自分の考え』を話すことになった。

エ　高校入試の『自己表現活動』で、『私が今頑張っていること』について話すことになった。

・言語活動の中で学習指導要領の指導事項に基づき、基本的な知識・技能と「思考・判断・表現」とを合わせて学習し評価する。

(2)　指導の手立て

ア　生きてはたらく言語能力を育てるために、多様な内容や形態の言語活動を数多く行うこと。

○状況を設定し、それらの状況における１分程度のスピーチを 10 分程度の時間で用意する。

○手近にある小紙片に話の内容や構成についてメモを書き、それに基づいてスピーチを行う。

○「ＴＩＰＳ集＆べからず集」の形で本単元の学習で学んだことを振り返り、今後の言語生活に生かす。

イ　適切に伝え合うために、「言語意識」を明確にした言語活動を行うこと。

○目的意識（何のため、どのようなねらいで）

○相手意識（誰に対して）

○場面意識（どのような場面で）

○方法意識（どのような方法・手段・条件で）

○評価意識（過程や結果は）

(3)　「話すこと・聞くこと」の授業における評価の課題

○「話す」という（すぐに消えてしまう）音声による表現を同一の基準で評価することの難しさしさ

○一人ひとりの「聞くこと」の状況を評価することの難しさ

○「話合い」の活動において指導者が一人しかいない状況で同時進行で行った場合、学習者一人ひとりの実現の状況を十分に見取ることの難しさ

→「パフォーマンス評価」が必要となってくる

※「パフォーマンス評価」とは

（『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』(平成22年3月24日)中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）

思考力・判断力・表現力等を評価するに当たって、「パフォーマンス評価」に取り組んでいる例も見られる。

パフォーマンス評価とは、様々な学習活動の部分的な評価や実技の評価をするという単純なものから、レポートの作成や口頭発表等による評価するという複雑なものまでを意味している。または､それら筆記と実演を組み合わせたプロジェクトを通じて評価を行うことを指す場合もある。

２　協議内容

(1) 研究授業後の協議に参加している生徒には、どのようなことを聞いているのか。

・この授業で何を学んだのか。

・生徒側の授業評価

※生徒に聞く時には質問が大切。時に辛らつな意見も出てくるが、それも含めてしっかりと受け止めることが大切。教師側が学ばせてもらう意味で聞く姿勢でいること。

(2) グループ活動に関して

・学級活動では６つのグループに。教科では３～４人のグループ作り。

時と場面・各単元でのねらいに応じて編成。

今回は「即興的なスピーチ」であったため、グループは座席で編成。

(3) 3年前と今回との実践を比較して（同一教材で二度研究授業を実施）

【3年前】

活動を考えるので精一杯。全てのグループを見きれない状態でいいものか。評価については不安が残ってしまっていた。

【今回】

ワークシートを改善し、「相手意識」・時間や場の条件といった「場面意識」をもたせる内容にした。また、学習の見通しがつくようにもなった。評価については、課題解決的な活動を評価するのが言語活動であるということを確信した。

(4) ワークシートに関して

評価をする際に使用するとのことは、事前に生徒に伝達済み。

ただし、教師側から「Ａ」を規定しない。

３　まとめ

「実生活で生きてはたらく言語の能力」を育成するためには、言語活動をする際に生徒の学習や生活の実態に合わせて設定することが大切になってくる。社会生活においては、その場の状況に応じて短時間で準備をしてスピーチをしたり、適切な対応を考えて対話・討論するような「即興的なスピーチ」といったケースが多い。その活動・経験が生徒一人ひとりの「生きる力」にもつながるのではないか。